様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 １０ 日現在

機関番号：３２６１２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｋ００１３９

研究課題名（和文）グノーシスとモニスムス――ドイツ近代美術の位相

研究課題名（英文）Gnosis and Monism -- Modern Art Movement in Germany

研究代表者
前田　富士男（MAEDA, Fujio）

慶應義塾大学・文学部（三田）・名誉教授

研究者番号：９０１１８８３６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：　ドイツ近代美術（19世紀末～20世紀）は、明確な綱領を持つ芸術家集団(Gruppe, Bund, Verein, Ratほか)の結成・解散を特徴とする。その歴史は、近代社会における共同体／集合体関連の変容や、社会システムや規範の機能主義的分化、また文化の複雑化を映出する。
　芸術的価値が多様化し「芸術の終焉のあと」が問われる現在、最重要の論点は「規範とデザイン」にほかならない。本研究は、グノーシス的二元論やモニスムス的一元論を視野におき、造形学校「バウハウス」を主題に、無規範的な多元性という「例外状態」に即して、倫理的なポスト・主体性の制作行為としての革新的なデザイン・芸術概念を構築した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　現代の文化状況は、科学的認識や情報科学的手法を優先し、倫理的行為や芸術的制作・感性的価値体験を重視しない。文化は、いわば危機的な時代に際会している。実在する制作物＝作品が使用価値や記号価値とは別様に、想像力を活性化する芸術的な機能は、今日の研究上、最優先されるべき課題にほかならない。
　わが国はもっぱら、工芸を応用芸術･デザインとみなし、経済的地域振興を環境デザインと同一視してきた。デザイン美術館が存在しない先進国は、わが国のほかにない。本研究の成果は、デザイン概念の根本的な再構築に寄与し、情報機器的コミュニケーションとは本質的に異なるコミュニケーション・デザインの実践にむけた契機になりうる。

研究成果の概要（英文）：German modern art(from the end of 19th- to 20th-century) is characterized by the formation and dissolution of many artists groups(Gruppe, Bund, Verein, Rat etc.) with a clear program. Its history reflects the transformation of community/association context in modern societies, the functionalistic fragmentation of social systems and the diversification and complexity of cultures.
At present, when artistic values are diversifying and "after the end of art"(postmodernism) is being asked, the most important issue is nothing but "design". This research focuses on the design school "Bauhaus" with the theme of "State of Emergency"(C.Schmitt) as non-normative, extralegal state, and based on the Gnostic dualism and the monism of German Monistenbund, in order to interpret an innovative design/art concept as an ethical production act in the contemporary society.

研究分野：芸術学

キーワード：バウハウス　コミュニケーション　デザイン　想像力　ポスト・主体性　規範　例外状態　グロービウス

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景
（１）21 世紀を迎えた今日、「多様化(diversity)」という概念は、あらゆる領域で格差の克服や社会的公正の追究、そして多文化主義と関連し、肯定的に理解される傾向にある。だが、すでにＪ・ハーバーマスは 1981 年に、近代が科学技術・倫理道徳・文化芸術という三つの価値領域を分化し、それぞれ文化的行為システムとして、さらにそのシステム内部で専門家の仕事を制度化し、複雑化してゆく危険性を指摘した（『近代――未完のプロジェクト』）。

（２）近代＝モデルネの芸術、なかでも造形芸術に注目すると、芸術の受容ではもっぱら専門家が芸術的価値を評定する「アートワールド」システムが確立し、他方、芸術制作では、複製や引用、借用、盗用、二次制作が一般化してきた。また芸術研究も、こうした背景を踏まえ、細分化した事象の実証的あるいは意味論的分析を行う傾向が著しい。

（３）専門性／多様性のパラドクス的解釈学的循環とも呼びうるこうした背景を認めつつ、われわれはしかし、美的芸術的「価値」をめぐる根本的なアスペクトを追究せざるをえない。それは、多様化の対極としての「規範性」である。

２．研究の目的
（１）美術史学では、ポスト・モデルネの造形芸術の可能性をめぐって、1990 年頃より、「美術史の終焉のあと」が論じられ、とりわけ美術領域における画像・映像メディアの過激な拡大に着目し、「イメージ論的転回」が指摘された。しかしながら美術史研究の方向は、造形芸術を芸術領域以外の認知科学、情報科学、行政的自治体論、文化産業制度など「多元的」水準から追究する道を歩むことになった。この方向は、芸術の出来事の細部に関する多数の「ヒストリオグラフィー(歴史記述)」を生む事態を生んだ。この事態を個別の研究で確認しなければならない。

（２）この事態の検証はしかし、芸術制作や受容に「規範」がどのように作動しているか、との根本的な問いに帰着する。なぜなら、近代までの芸術制作・受容は社会規範や集団規範に対する適応、改革、逸脱、批判、否定といった水準で把握しえたからである。だが、近代芸術は、社会規範・対・芸術的規範、集団的規範・対・感性的自律的規範という対極的構造を本質視しない。この変容は、美術史学的に具体的に実証する必要がある。

（３）本研究は、20 世紀初頭のドイツの美術領域の「芸術家団体運動」に注目し、芸術家団体がいかなる共同体(コミュニティ＝共同体＝ゲマインシャフト)を目指し、社会制度的集合体（アソシエーション＝集合体＝ゲゼルシャフト）とどのように関わったのか、それを美術史の文脈から把握する。具体的には、「規範の変容」をブリュッケ(1905)から青騎士、芸術家評議会、ヴァイマル・バウハウス(1919-1925)にいたる過程に即して追究する。

３．研究の方法

（１）多様化とは、規範の多数化・無効化の現象にほかならない。それゆえ、この現象を解明するために、むしろ 20 世紀初頭の規範性の少数的発現をこれと対比する方法をとった。すなわち、二元論的なグノーシスと、エネルギー転移や相転移を主題とする近代的モニスムス（一元論）に着目する方法である。

（２）具体的な対象として、ヴァイマル・バウハウスに着目する。なぜなら同校開設時に配布された「声明と綱領」(1919 年 5 月）の検証が最も重要だからである。これは芸術家集団を「ハウス」的共同体と規定し、その共同体が行う教育活動を新しい社会にむけた「造成(Bau)」の「デザイン(Gestaltung)として提示した。それが「綱領（プログラム）」の主張である。ここには芸術家集団と社会的規範との関連を再構築する意思が明示されている。だが、従来の研究史は、その関連を単純な二元的対極構造、つまりグノーシス的二元論を模した対立図式に収めるにすぎず、これは不当である。
　バウハウスは、2019 年に開設 100 周年を記念する多数の研究書出版、展覧会開催を実現した。またバウハウス美術館の開設（2019 年 4 月)、バウハウス大学の研究アーカイヴやテューリンゲン州立アーカイヴほかが整備され、ドイツ再統合(1990 年)後のヴァイマル市内の学術体制整備も進捗し、一次資料・二次資料の体系的調査が可能になった。本研究は、こうした機関での資史料調査を基本とし、数度にわたる研究滞在（ベルリンでのアルヒーフ・アルバイトも含む）を実行し、バウハウスの芸術的共同体の運営について、評議会制社会主義的規範と議会制民主主義的規範との相剋が作用する様相を追究した。これは、グノーシス主義的な結社的芸術家集団を 20 世紀の社会的政治的規範との対比から追究する試行的な関心にもとづく。

（３）他方で第二に、1910 年代のドイツ美術を視野におき、画家パウル・クレーの制作論と心理学者ユング、また画家の親友の心理学者 Fr.ロートマルの失語症研究との関連について、チューリヒ・ユング研究所やミュンヘン大学・大学病院神経科研究所における資料調査を計画した。これは同時に、W・オストヴァルトの「Energetik(エネルギー一元論)」について、とくに大地のエネルギーと熱的死の問題相をエネルギー転移の一元性から分析する計画と連動し、画家クレーの特性でもある「言語論」的知的関心と、物質本位的な造形制作論的関心とを「モニスムス」的な転移・変換から把握する研究に接続する。ライプツィヒ大学と同市のオストヴァルト協会にて資料を精査し、20 世紀初頭の多くの庭園・風景画作品（抽象を含む）のモティーフに、このエネルギー・エントロピー論が作用しているとの申請者の仮説を論証する試みである。しかし、この第二の研究計画は、2020 年 3 月からのコロナ感染症状況が 2021 年 3 月まで続き、実行困難となった。

（４）上記の第一、第二の研究課題については、チューリヒ大学美術史学科 W・ケルステン教授と国際シンポジウム開催を検討したが、コロナ感染症の推移から、ドイツ、スイスでの研究計画の変更や国際的研究会開催の断念を余儀なくされた。そこで、申請者は 2019 年 6 月に、バウハウス創立１００周年記念研究集会を組織し、向井周太郎武蔵野美術大学名誉教授ほかとともに、研究発表を行った。またその経緯を踏まえ、社会的規範と芸術家集団的規範の関連に研究の重点をおく方法論的姿勢を明確にし、以後、ヴァイマル・バウハウス(1919-1925)と 20 世紀のデザイン概念を芸術家共同体と社会制度集合体との関連から再構築する試みを発展させた。

４．研究成果

（１）本研究の成果は、学会誌『形の文化研究　2019』（13 号、特集号「バウハウス 100 周年＜危機を戦う者たちのバウハウス＞」、形の文化会、2020 年 3 月）に、集約された。バウハウス 100 周年を記念する出版や展覧会、学会、記念催事は世界中で多数開かれ、多くの新しい知見が開示された（2019 年)。とくにドイツでは、ドイツ再統合後の 21 世紀初頭の学術的記念行事として、100 周年を期に、ブリュッケ（2005)、ドイツ工作連盟（2007)、デア・ブラウエ・ライター(2011)、そしてバウハウス(2019)が開催された。なかでもバウハウス 100 周年は最大の学術的催事となった。だが、わが国では、みるべき新しいバウハウス研究成果はほとんどなく、回顧的内容に終始した観が否めない。とくに研究面では、ドイツのこの 20 年間の新しい研究成果を視野におかず、研究文献目録も掲載しない出版がほとんどを占める。本学会の記念大会と、その出版としての学会誌特集号は小冊ながら、いわばわが国の現時点での研究成果を提示する例外的に充実した内容になった。
　この記念大会開催と、学会誌 13 号の編集・出版は、すべて学会会長としての筆者前田富士男の企画と努力によって成立した。学会誌 13 号は、発行奥付を 2020 年 3 月 31 日とするが、コロナ禍ほかによる刊行遅延で、実際には、2021 年 4 月初めに上梓された。すなわち同学会誌は、バウハウスの日本受容の実証というべき桑沢デザイン研究所（1954 年４月開校）の協力のもとに筆者が作成したバウハウス研究書といって過言ではない。内容は、桑沢デザイン研究所所長・デザイナー浅葉克己、武蔵野美術大学名誉教授・デザイナー向井周太郎、東京造形大学教授粟野由美、大阪府立大学名誉教授金子務、慶應義塾大学非常勤講師山根千明、そして筆者前田富士男による論文集である。これは言い換えれば、筆者への本科研費助成事業による成果にほかならない。

（２）前田富士男の同学会誌掲載の論文「危機と戦うバウハウス・デザイン(Gestaltung)――W・グロピウスと K・Fr・シンケルの＜例外状態＞を再考する」は、約 40 頁にわたる論考で、概要は以下の通りである。
　ドイツ近代美術(19 世紀後半～20 世紀)は、明確な綱領（プログラム）を掲げて正式な入会者・参加者を募集し、あわせて支援者・協力者を認定してゆく手続きをとる多数の「芸術家集団(Künstlergruppe)」によって形成された。この芸術家集団は、Gruppe（グループ・団体)、Bund（同盟・連盟)、Verein（協会)、Rat（評議会）などと称した。従来の美術史研究ではこうした集団の問題は注目されず、たとえば「ドイツ工作連盟(Deutscher Werkbund)」はデザイン運動上の一団体と認識され、Bund という組織体である事態は看過されてきた。「バウハウス(Bauhaus)」という造形学校名も、創設者W・グロピウスの芸術家集団に対する熟慮と検討のうえで選択された。これは、社会規範に対する芸術家共同体の取り組みを告知している。
　こうした事態の背景には、ウィーン会議(1814/15)以後、ドイツ連邦が領邦制をとり、各領邦が多様な統治体制をとった政治史、また産業革命によって上位市民層・有産市民層・教養市民層に新たに労働者層が大衆社会の拡大を具現するように加わった社会変化、さらにバイエルンのカトリックとプロイセンのプロテスタントの対立も想定せざるをえない。とりわけ 20 世紀初頭には、ロシア革命と第一次世界大戦敗戦(1918)のもとで、市民層そのものが、選挙・議会制民主主義と委員委嘱・評議会制社会主義との対立に直面し、ドイツ革命(1918-)の推移は、芸術家集団の現実にも大きな変化をもたらした。なるほどヨーロッパ近代美術は 1905 年以後、表現主義、フォーヴ、キュビスム、抽象絵画、構成主義、ダダ、シュルレアリスムと多様な芸

術家集団・運動（イズム）に分化してゆくから、ドイツ近代美術もその一環をなす動向とみなし、ドイツ的「芸術家集団」を重視する観点に批判もありうる。だが、ドイツ近代の芸術家集団の特性は、各集団がそれぞれの芸術制作を自己批判的に検証し、集団が芸術制作的水準で集団内の共通した表現様式・美的価値を共有したり志向したりせずに、ひとつの芸術家集団性を明確に主張しながらも、制作上の様式の水準では多様性を要請するという点に現れる。これは注目すべき性格にほかならない。というのも、ここには、同一の表現様式・美的価値を志向する芸術家集団の特性というよりも、芸術家集団と市民社会との関連をめぐる近代的意識変革そのものが浮き彫りにされるからである。

Ｊ・ハーバーマスを引くまでもなく、近代（モデルネ）社会の特性は、それ以前の世界像全体を支えていた実体的理性が後退し、科学的道具的真理、道徳的法的実践、感性的（美的）芸術表現という三つの価値領域と文化的行為システムに分化・自立化した事実に認めてよい。この分化は同時に、認識や行為の領域のみならず、とくに芸術表現においては、多様化・複数化、つまり「複雑化」を生みだした。近代文化の貧困化は、社会構造の変容に連動する。つまり、親縁的共同体(コミュニティ)と契約的集合体(アソシエーション)との接続は弱化し、共同体に替わって集合体が肥大化する構造変化である。この変化は、複雑化と連動していよう。

近代芸術領域でも、とくに物質本位的制作を実践する造形芸術は、純粋性・自律性・独創性を指標価値とするハイ・アート作品に対して、集合体的大衆社会で機能する記号性・経済性・複数性をまとうデザイン作品を急激に発展させた。19 世紀後半からのドイツにおいて、芸術家集団は、市民社会内の集団活動の意味を検討しつづけ、とりわけドイツ工作連盟やバウハウスが注目すべき活動を展開した。

本研究計画は当初、ドイツ一元論同盟(Monistenbund)の活動を手がかりとし、またプロテスタント・プロイセンとカトリック・バイエルンの倫理的背景にグノーシス的二元論を想定したが、2019 年度末からのコロナ感染症状況でドイツにおける調査研究や国際シンポジウムの開催が困難となり、バウハウスの創設者 W・グロピウス(1883-1969)のデザイン思想の基本構造を明らかにする作業に重点をおき、学術研究の必ずしも多くないこの建築家の活動を明確化した。

グロピウスのデザイン活動を理解するために、筆者は同時代の法哲学者カール・シュミット(1885-1985)の「例外状態」概念を取りあげ、非常事態における超法令的かつ規範停止的な事態を検討した。じつはグロピウスは第一次世界大戦終局時（1918 年 11 月-）にプロイセン・ベルリンのドイツ革命でこうした事態を体験しており、カトリック・ミュンヘンに生活したシュミットと同様に例外状態を理解していたとみなしてよい。すなわち、規範停止とは規範の決定根拠を検証する作業であり、それは主権者に内的な相剋や相互排反的二重性を突きつけ、一種の不決定性のうちに人格的ピスティス（信頼）を探り当てようとする倫理的地平をもたらす。いささか冒険的なグロピウス解釈ながら、かれのバウハウス・プログラム(1919 年 4 月)をこうした視点から読み解くと、ドイツのデザイン思想の基盤が明らかになる。それは、ベルリンの建築家Ｋ・Ｆｒ・シンケル(1781-1841)の活動に遡行する。

シンケルは通常、新古典主義の建築家・画家と理解されるが、この芸術家はドイツの「デザイン」の開拓者以外の何ものでもない。かれの作品に通底する造形思考は作品の多数性・多様性の志向であり、「ポスト・主体性」の実践理念に連続する。この理念は、そのまま近代的市民の人格の理解に連続しており、同時に、現代社会の規範を考察するうえでの有力な手がかりとなりうる。

今日のドイツの美術史研究は、芸術学・芸術哲学の中心概念の役割を担ってきた「形成(Gestaltung)」をデザイン(Design)と同義に解する方向をとっている。ゲーテの形態学やゲシュタルト心理学の内実を知る研究者には、この方向は、ゲシュタルト概念の過度の拡張に陥りかねず、そのままには到底、首肯しえない。だが、「芸術の終焉のあと」を歩み始めた 21 世紀社会の文化状況を視野におくとき、デザイン活動が多数性・複雑性を基盤としつつ、ポスト・主体的な倫理性や人格を輪郭づける道筋に歩を進める事態は、芸術活動全般に大きな示唆を与えうる。現代美術は、自律的な美的価値の実現をめざす芸術家共同体ではなく、ポスト主体性を自己批判的に制作基盤に定位するデザイナー集合体を生みだしている。

20 世紀初頭ドイツの芸術家集団の活動は、表現様式上のイズムの継起ではなく、近代市民社会の社会規範への問いかけと、制作者としての自己批判の継承であった。この事態は、今日のデザイン学的な規範概念の再構築を予示していると解釈しなければならない。

（３）以上の研究成果は、すでに単行書として出版しうる内実をそなえており、他のアスペクトの考察を追加して 2021 年度内の単行研究書の刊行実現を検討している。また上述した『形の文化研究』13 号には、筆者の編集した「バウハウス（1919－1933）――主要研究文献／1919－1933－2019」と題するバウハウス研究の重要資料集（一次資料・二次資料、時系列順）を掲載した。これは一見、簡易な成果に見えかねないが、100 年間にわたる厖大なバウハウス研究資料に関するこうした集成は、実は国際的にみても、ほとんど欠落していると言わざるをえない。なぜなら、100 年間にわたる研究資料を網羅的に閲覧し、最新の研究情報も検討したうえで、しかも、ある個人研究者の特定の学術的観点にもとづく最新の評価・選択から作成された「書誌一次資料」は、きわめて困難な研究作業を要請するからである。こうした基礎的な成果も、本科学研究費助成によって実現したことは明記したい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　6件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 前田富士男	４．巻 12
２．論文標題 ゲーテの地質学素描からＣ．Ｇ．カールスの地景画へ――スイスのゲーテ、そして『経験の再形成』としての実験	５．発行年 2019年
３．雑誌名 形の文化研究	６．最初と最後の頁 47-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 前田富士男	４．巻 36
２．論文標題 大地(Land)の芸術学――庭園と建築を歩む	５．発行年 2019年
３．雑誌名 慶應義塾大学教養研究センター＜教養研究＞ 講演記録集	６．最初と最後の頁 156-176
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 前田富士男	４．巻 27
２．論文標題 ジェネティック・アーカイヴにおける＜歴史＞の再検証――ポスト・ヒストリカルとポスト・メディウム、そして《江之浦測候所》	５．発行年 2019年
３．雑誌名 慶應義塾大学アート･センター　Booklet 27	６．最初と最後の頁 11-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 前田富士男	４．巻 41
２．論文標題 《ローマ荘》建築家としてのゲーテ――＜物質＞の感性学と大地の解釈学	５．発行年 2019年
３．雑誌名 モルフォロギア	６．最初と最後の頁 16-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 前田富士男	4．巻 2
2．論文標題 前衛としてのグラフィクの＜方位＞――バウハウス創立100周年とヨースト・シュミット	5．発行年 2019年
3．雑誌名 DNP文化振興財団　学術研究助成紀要	6．最初と最後の頁 196ー208
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 前田富士男	4．巻 1069
2．論文標題 ＜なぜ、あなたに触れては、いけないの＞の芸術学――マグダラのマリアとともに＜時間＞を問う	5．発行年 2018年
3．雑誌名 カトリック生活	6．最初と最後の頁 5-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 前田富士男	4．巻 36
2．論文標題 ドイツ20世紀美術のモダニズムと＜エキュメニズム＞――パウル・クレーを視野において	5．発行年 2019年
3．雑誌名 明治学院大学　言語文化	6．最初と最後の頁 352-379
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 前田富士男	4．巻 13
2．論文標題 危機と戦うバウハウス・デザイン――ヴァルター・グロピウスとK・Fr・シンケルの＜例外状態＞を再考する	5．発行年 2020年
3．雑誌名 形の文化研究	6．最初と最後の頁 23-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　7件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 前田富士男
2．発表標題 美術の終焉とバウハウス　――　＜例外状態＞（C・シュミット）のゆくえ
3．学会等名 形の文化会　2019年度大会
4．発表年 2019年

1．発表者名 前田富士男
2．発表標題 バウハウス100年における論争と葛藤―― 美術史のヒストリオグラフィー(Historiografie)とポスト･ヒストリカルのいま
3．学会等名 三田芸術学会　2019年度研究例会（招待講演）
4．発表年 2020年

1．発表者名 前田富士男
2．発表標題 自然科学と芸術 ―― 1960年と2000年の二つの＜転回＞
3．学会等名 日本科学協会　2019年度　第12回科学隣接領域研究会（招待講演）
4．発表年 2020年

1．発表者名 前田富士男
2．発表標題 近代美術における＜旅＞の非・神話化
3．学会等名 慶應義塾大学アート･センター　アーカイヴ20周年記念シンポジウム（招待講演）
4．発表年 2018年

１．発表者名 前田富士男
２．発表標題 建築の時間と彫刻の物語――美術の歴史とゲーテ
３．学会等名 ゲーテ自然科学の集い　2018年度大会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 前田富士男
２．発表標題 ゲーテの鉱物学と C.G.カールスの地景画
３．学会等名 形の文化会　第69回フォーラム（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 前田富士男
２．発表標題 20世紀美術のモダニズムとエキュメニズム
３．学会等名 明治学院大学言語文化研究所・ドイツ語圏美術史研究連絡網　シンポジウム「ドイツ美術とプロテスタンティズム」（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 前田富士男
２．発表標題 大地(Land)の芸術学
３．学会等名 慶應義塾大学教養研究センター　基盤研究講演会　2018年度第3回（招待講演）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関